
今日のFE

独活

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日のFE

【Nコード】

N33250

【作者名】

独活

【あらすじ】

何故かマイユニットが封印のオージェで、
何故かアンナさんとゲーム展開を実況しながら進める
ちょっと変わった新・紋章の謎。

原作と同じ性格のユニットはほとんど登場しません。

原作のイメージを著しく損なう恐れがあるのでご注意下さい。

あとカタリナさん可愛い

前日編 0 はじまり

アンナ「こんにちはー。とりあえず、FE新紋章をプレイしてみまーす。

理由は聞かないで下さーい。進行は私アンナ先生と、マイユニットで進めまーす」

マイユニット「よろしく願います。」

アンナ「それじゃー、はじめにあなたの名前だけど…」

マイユニット「デフォルトはクリスです！クリスがいいです！」

アンナ「そういう事で、オージェにしまーす」

オージェ「先生！どうしてオージェなんですか！

僕マイユニットですよー！なんでエレブ大陸の傭兵の名前がここに出るんですか！」

アンナ「デフォのマイユニット見たら、

作者は三秒でオージェを思い浮かべたからそのままオージェよ。傭兵が一番いいかなとも思ったし」

オージェ「そーですか…じゃ僕オージェですか？」

アンナ「そーよ。あと言葉遣いが、

普通のマイユニットより腰低いのは作者の趣味だから許してねー」

オージェ「まあ、理由もあるんですがね。」

アンナ「…さてさて、これから新紋章はじめるわけだけど、まあ、普通じゃチョトつまらないと思うのよ。」

オージエ「と言いますと？」

アンナ「とりあえず難易度はルナねー」

オージエ「ルナティック！ナンデスカこの難易度！

FEにこんな難易度がついたんですか！東方の影響ですね！」

アンナ「違うと思うわー。とりあえず、マニアックより上みたいねー」

オージエ「酷いであります！先生！

前作のH5すら、ミシエイルが出てくる章で止まってるんです！

そんなヘボプレイヤーにそれは無理です！」

アンナ「無理とか言わないの。やってみなくちゃわからないでしょう」

オージエ「結果は見えてますが」

アンナ「まあまあ、最後まで続く事を期待しましよー。」

オージエ「絶対無理であります！先生！…あつ、でも、これなら…」

アンナ「今あんたカジュアル選択しようとしたでしょ。」

オージエ「えつ、で、でもルナですよ！」

アンナ「FEプレイヤーたるもののクラシックを選ぶのがせめてもの礼儀だと思わない？」

オージエ「思いません！」

アンナ「貧弱ねー、とりあえずクラシックで鍛えなおしてきなさい」

オージエ「NOOOOO」

アンナ「あと、作者のプレイ歴だけど、

FE歴は8年で、封印、烈火、聖魔、新暗黒をプレイしましたー。
据え置きは未プレイ。

ハードもなんとか出来るくらいのレベルなんだけど、

封印ハードは13章の闘技場で稼いでたら突然データ消えて、それ以来触ってないわー」

オージエ「酷いんですよ！せっかくタイトたんを強くしてたのに、途中で中断して、もっかい電源つけたらデータが何もないんですよ
！！」

アンナ「GBAで特に封印はそういう傾向にあるからしょうがないわー。

封印は五回くらい消えたけど、未だによくプレイする、素晴らしくハマった作品ねー。

あと聖魔も二回消えたけど、烈火は一回も消えてないわ。

中古でもかなり烈火が高いのはこういうところにもあるのかしらー」

オージエ「先生！話がそれてます！」

アンナ「ああ、はいはい、あと、今作は、初プレイ時はとりあえず、ノーマルクラシックでクリア、で今回が二周目よー。

でもまあ、会話は一周目のノリで進んでいくご都合主義だからそこ
んところよろしくー」

オージェ「無茶であります！先生！

ハードとマニアックをすっ飛ばしていきなりルナとか無茶すぎます
！」

アンナ「はいー、それでは、

楽しい楽しい、愛と勇気の新紋章ルナティック、はじまりはじまり
！」

オージェ「お願いですから話聞いてください！」

アンナ「おっと、忘れてた。質問しなくちゃ。あなたの性別は？」

オージェ「今更ですか！男性です！」

アンナ「あなたの過去は？どんな過去？」

オージェ「貴族の子です！」

アンナ「嘘をついちゃ駄目よー。オージェさんは貴族の子じゃない
わ」

オージェ「だってルナなんですよ！速さが欲しいんです！
傭兵ルナなんですからステ決定くらいはさせて欲しいです！」

アンナ「まあ、とりあえずはそれでいいわ。それで？現在のあなた

の才能は？」

オージエ「異質さです！これは適当に決めました！」

アンナ「確かにアンタの異質さは相当ねー。さっきまでの会話で分かるわ」

オージエ「あなたに言われたくないです！」

アンナ「で、未来は？何目指すの？」

オージエ「ポケモンマスターです！」

アンナ「殴るわよ？」

オージエ「ごめんなさい！未来は博愛者になりたいです！」

アンナ「へー、そう。ちなみに、なんで？」

オージエ「守備成長が上がるからです！」

アンナ「そんな理由で博愛者になりたい人聞いたことないわよー。」

オージエ「実は作者はこれ始める前にふざけてルナやったら爆死しました！

で、その時の教訓から守備がいるって学んだんです！

でも当然速さも必要ですから、

作戦としては、過去で貴族を選んで速さをとりあえず上げます！

傭兵だから、速さくらいほっといても上がるんで、

成長率は守備です！守備が要るんです！だから未来は博愛者！

で、現在は適當です！」

アンナ「へー、なかなか貴方にしては考えたじゃない。
分かってるわねー、ルナティックはもう、私が出てきた時から戦いは始まっているのよー。
それは分かってるみたいねー」

オージェ「当然です！」

アンナ「そういえば、博愛者ってなんで守備が上がるのかしら？」

オージェ「それは、博愛者ですから守備範囲が広いからです！」

アンナ「上手い事言ってるようで全然上手くないわよー」

オージェ「結構正当な理由だと思ったんですが…」

アンナ「それでは、改めて。

楽しい楽しい、愛と勇気の新紋章ルナティック、はじまりはじまり。
」

前日編1 出会い

あらずじ

とりあえずオージエがアリティア騎士団に志願しに行った

オージエ「今作では難易度高くても前日編があるんですねー」

アンナ「それだけ前日編が重要な役割を成してるのよ」

ドンッ

オージエ「ぎゃっ！いきなり誰かにぶつかられた！誰だ！ぶつかる奴は！

将来の英雄となる、マイユニットオージエを暗殺しようとする者の手先ダナー！」

アンナ「軽いノリで言ってるけど実は的を得てるのがちょっと怖いわね」

カタリナ「ご…ごめんなさい」

オージエ「！！？センサー！！誰ですかこの可愛い女の子は！セシルさんってDSだとこんな美少女なんですか！」

アンナ「SFCでセシルの髪は紫っぱいけど流石にそれで結ぶのもどうかと思うわー」。

あなた説明書見ずにゲームプレイするタイプでしょー」

カタリナ「あつ、私…カタリナといいます」

オージェ「カタリナ！カタリナさんというんですね！

僕はオスティアの傭兵になるべく来たオージェといいます！」

アンナ「なんで元のオージェに戻ってるのよー。ここはエレブじゃないわよー」

オージェ「グラからして魔道士かな？カタリナさんは！

さっきは脅すような台詞を言ってしまったてごめんね！

さあ、僕と一緒に目の前にある大人の階段を！」

アンナ「自重なさいー。」

カタリナ「ジェイガン様から話があるようです！一緒に行きましよう！」

オージェ「一緒に行きましよう、とか、完全にフラグでしょうこれ」

アンナ「何でもかんでもフラグと受けとらないの」

ジェイガン「マルス様に仕えるには、相応の実力が必要となる！」

カタリナ「うわー…周りに一杯人がいますねー」

オージエ「僕は右下のソルジャーとシスターが気になります！
ソルジャーとシスターって、コイツら確実に試験落ちますよね！」

アンナ「確かにこの人たち誰だか気になるわねー。
ソルジャーでも、エフラム兄上なら強いけどね」

オージエ「それに、このソルジャーとシスター、
さっき僕がカタリナさんとぶつかったところでも近くにいました！
いい関係なんですかね！エフラム兄上がまさかナターシャと結ばれるとか！」

アンナ「変なとこだけ見て変に話を進めないのー。」

ジェイガン「…という事だ！訓練を始める！
二人一組になれ！相手はアリティア正騎兵だ！」

カタリナ「あつ、どうしよう…あの、私と組んでくれませんか？」

オージエ「いいとも！指でも腕でも、足を組んでもいいんだよ！生足万歳！」

アンナ「だから自重しなさいー。」

カタリナ「私、戦いは苦手で。軍師として来たんですけど、戦う力はないんです。」

アンナ「カタリナちゃんもカタリナちゃんですルースキル高いわね

」

オージェ「戦う力はない？えっ、でも魔道士だよね？グラフィック」

アンナ「アンタ変なところで鋭いわねー」

カタリナ「あ、い、いえ、これは…飾り、飾りなんです。

オージェに戦ってもらわないと、私は…」

オージェ「いいともいいとも！変な疑いかけてすまなかつた！

僕に任せて！戦闘なんて一瞬で終わらせてあげるよ！乱れ雪月花！」

アンナ「意味が分からないわよー。」

オージェ「で、やっとこ戦闘が始まりました」

アンナ「あんたの下らない茶番に付き合ってたから遅くなったのよー」

オージェ「で、何？あのソルジャー、兄上のくせに強くないですか？」

アンナ「いちいちエフラムネタを使わないの。ていうか兄上も強いから。

そうねー、確かに、技2桁あるしねー」

オージェ「何でソルジャーのくせに命中100%で必殺2%もあるんですか！」

アンナ「これがルナティックよー」

オージエ「とりあえずF Eの基本。おびき寄せて倒す」

アンナ「いかに能力が高くともソルジャーだからねー、追撃できるし楽勝ねー」

オージエ「あとはJ - G U Nだけです！

前作のH 5で意味不明なくらい弱かったジェイガンくらい僕の敵ではありません！」

アンナ「頑張ってねー。」

ジェイガン「ほう、おぬしがオージエか」

オージエ「ジェイガンにしちゃ妙にステータス高いけど気にせずいくぞ！」

カタリナ「オージエさん頑張ってー！」

ジェイガン「ん、死んだバアさんがわしを呼んでる」

オージエ「今のカタリナさんだよ！バアさんには程遠いよ！！
アンタそんな幻覚みてよくまだ騎士やってられるな！
早よ引退しろ！！」

ジェイガン「ああ、いやいや、ちょっと今日は腰痛だもんで」

オージェ「腰痛と幻覚は関係ねーだろ！！」

ジェイガン「まあ、かかってこい」

オージェ「まあ、じゃないよまあ、じゃ！

でも、この様子なら楽勝だな！やっぱり所詮はジェイガン！

カタリナさんに良いとこみせるんだ！喰らえー！…」

オージェ「ゲボアッ」

アンナ「あらあら」

オージェ「センサー！必殺受けて死にました！

これ運ゲーじゃないですか！

なんでJ・GUNに必殺がついてるんですか！」

アンナ「まあ、今はまだ良い方だと思うけどねー」

カタリナ「そんな…！しっかりして下さい！オージェさん！」

オージェ「大丈夫ダイジヨブ、こんな傷軽ーいゲボッ」

カタリナ「オージェさーん！！！」

アンナ「GAME OVER」

アンナ「…という事でやりなおしよー」

オージエ「じょ…序章から必殺喰らうとは思ってなかった…」

アンナ「まあ、あれは運が悪かったのね。普通は倒せるから」

オージエ「ジエイガン！さっきはよくもやってくれたな！ドリヤー！ジエイガン撃破！」

アンナ「レベルアップねー、これでさっき言ってた守備上がらなかつたら笑い物だけど」

オージエ「…守備と、速さだけあがりました。」

アンナ「珍しいわねー、他は何も上がらず、これだけ上がるなんてでもまあ、速さと守備が一番欲しいステータスだから、とりあえずはOKねー」

ジエイガン「なかなかだな！」

カタリナ「やりましたね！オージエ！」

オージエ「くつく、僕にかかればこんな老兵…」

ジェイガン「それでは、お前達を今日から見習いと認める！
これから、マルス様の騎士として相応しい力をつけるのだ！」

オージェ「はい」

アンナ「さてさて、とりあえず前日1は楽にクリアね。ここからが
本当の地獄よ……」

前日編2 若き従騎士たち

あらすじ とりあえずオージェとカタリナは第七小隊となった

カタリナ「とりあえず、第七小隊です！」

オージェ「ほー、で？この将来の英雄と共に戦える、選ばれし者達
は？」

アンナ「前日1をクリアしたからって余裕になってんじゃないわよ
ー」

ルーク「おお！ここが第七小隊か！」

カタリナ「ソーシャルナイトのルークさんです。」

ルーク「君、名前なんていうの？」

カタリナ「あ…カタリナです。」

ルーク「カタリナちゃん！今度一緒に、食事でもどうかな！」

オージェ「何を！カタリナさんに寄り付く悪い虫は僕が許さーん！」

ルーク「なんだてめえ！」

ロディ「やめろ、ルーク。同じ小隊の者に声をかけるなんて仲間同士の信頼が一番大事だ、それがいきなり崩れたらどうする」

カタリナ「あ…ありがとうございます。

彼は、ロディさん。彼もソシアルナイトです」

オージェ「おおー！葉っぱだ！葉っぱが目の前にいる！」

ロディ「誰が葉っぱだ… だが何故か、私は昔からよくそう言われるのだ。

葉っぱって、何の事なんだろう…？」

オージェ「昔々、リーフという者がいてだな…」

ライアン「こ、こんにちは！」

オージェ「ん？どうした、坊や？迷子か？」

ライアン「迷子じゃありません！僕も第七小隊の一員です！」

カタリナ「彼はライアン君…アーチャーです」

オージェ「ええっ！？こいつが弓兵！？

なんと…封印のラルトの女子人気を受けての事か…」

アンナ「言つとくけど、もとの紋章は封印の前だからねー」

オージェ「そうか…」

君もきつとヲルトと呼ばれるんだろうね…可哀想に…」

ライアン「へ？」

アンナ「ライアン君は育てればめっちゃ強いわよー。ヲルトなんか目じゃないわ」

オージエ「そうなのか…しかしなんだ、こんな子供が…」

カタリナ「あつ、そうそう、この中で隊長を決めろって言われたんです。」

ロディ「隊長？」

ルーク「おー、隊長か！そんなに言うなら、この俺、暁の聖騎士ルークがなつてやつてもいいぜ！」

ロディ「誰も何も言っていないぞ…」

カタリナ「ま、待って下さい。」

オージエ「そーだそーだ！誰が暁の聖騎士だ！真の英雄はこの僕、マイユニットのオージエ…」

カタリナ「私は、オージエを推薦します。」

オージエ「お！だよねー！」

カタリナ「少し変な人ですけど、とても強いです！それに、私を見捨てず戦ってくれました。」

オージェ「少し変な人…だと…？本来そんな会話はないぞ！！」

アンナ「ここであの『異質さ』が出たのねー」

オージェ「ここでそれかあああ！！！！

何で！？異質さってストーリーに関係ないでしょ！？」

アンナ「まあ、それくらいしないとこの小説成り立たないしねー」

ルーク「ほー、そうか、オージェか。でもお前で大丈夫か？戦いは出来るのか？」

オージェ「なめるなー！ルナの前日編1をクリアするくらいは出来るぞー！」

アンナ「全然駄目じゃない」

ルーク「なら俺と戦ってみようぜ。まさか、俺と戦うのが怖いなんて言わないよな？」

オージェ「ねーよ！ルークごとき…」

カタリナ「ば、馬鹿にしないでください。

オージェはあなたに負けたりなんかしません。」

オージェ「カタリナさん…天使…」

ルーク「そうか！なら、お前表出る！直接決着つけてやる！」

ロディ「…まあ、隊長としての適性を決めるには、対決しかないか。俺とルーク、オージェとライアンで、とりあえず戦ってみよう」

オージェ「えー？この子とー？」

ライアン「よ、よろしくお願いします…」

オージェ「足は引つ張らないでくれよー？」

ルーク「ロディは待機してくれ！相手は子供とオージェだ、俺一人で十分だ！」

ロディ「そうか。だが、相手をあまりなめるときつと痛い目を見るぞ。」

アンナ「はい、そういうわけで始めましたー」

オージェ「ルークくらい簡単に倒してやらー… …？」

アンナ「どうしたのオージェくん？

さっきあんなに余裕がましたのに顔が青ざめてるわよー？」

オージェ「な、何だ、こいつ…！？ステータス！ステータス何こいつ！？」

アンナ「落ち着きなさいー。」

オージェ「強すぎんだろ！！おい！！HP32って何なんだよ！！
お前もう隊長でいいよ！いいからこっち来ないで！！」

アンナ「負けを認めるのが早すぎるわよー」

オージェ「何！？ダメ12って！一回喰らったらお陀仏じゃん！！
ひっ、ひいい、こっち来んなー！！！！」

ルーク「子供は休んでた方がいいぜ。俺の相手はオージェだけだ！」

オージェ「とか言いながらライアン君をぺちぺちするルーク、マジ
外道」

アンナ「格好悪すぎねー」

オージェ「ぎゃーそ、ニターン目でライアン君が死にました！」

アンナ「傷薬使いなさい。」

オージェ「でも、攻撃しないと、相手のHP減りません！」

アンナ「うーん、そうね、敵ターンの合間に唾でもつけときゃ治る
わよ」

オージェ「唾でHPが10も回復するFEなんて嫌です！」

アンナ「とりあえずリセットするしかないわねー。ライアン君死ん

じゃー」

オージェ「おっ！今度はこっちに向かってきました！」

ルーク「おい！噂は聞いたぜ！あのジェイガン様が目を見張るほど、ずば抜けた素質の新人が、一回必殺で死んだってな！」

オージェ「そこかよ！！誰だよそんな噂流したの！！」

ルーク「だが、必殺で死んだにしろ強いってのは確かな噂だ。俺の活躍がかすんじゃうほど目立ちやがって！」

オージェ「今のアンタの方が十分強いよ！！」

アンタなんでジェイガンに注目されないのかわかんないよ！！」

ルーク「ここでお前を倒して、俺が一番目立つ！覚悟しろ！！」

オージェ「くつ、強い、だが！こちらは追撃が出来る！

そして一旦引いて傷薬で回復、ライアン君が弓で攻撃！」

ルーク「くそっ！このガキ！」

オージェ「ライアン君に気を取られているルークを撃破——！」

ルーク「ぐあっ！くそ、何でこの俺が……」

アンナ「とりあえずルークは倒したわね。」

オージエ「葉っぱは近づかない限り攻撃してこないっぱいので、冷やかしのごとく砦に待機しまくってHP回復です！」

アンナ「貧弱ねー」

オージエ「何とか態勢を立て直しました！

ロディも強いけど、ルークを倒せたんだからこいつも倒せるはず！
来い！ロディ！勝負だ！」

ロディ「…私も君の噂を聞いていた。」

オージエ「また必殺でやられた噂ですか？」

ロディ「君の実力を確かめたい。隊長になるといつのやら、なおさらだ。」

オージエ「いや、あんたかルークで良いと思うよ…隊長は」

ロディ「アリティア騎士団ロディ、一手所望する。」

オージエ「ぐわっ！槍やだ！槍嫌い！ライアン、援護を！」

ライアン「はい！」

ロディ「くっ、弓兵か…近づいて戦うべきだな」

オージェ「で、ライアン君に気を取られてるロディを撃破―！」

ロディ「！なるほど…噂通りの実力だ…」

ルーク「くっそー、仕方ない。オージェが隊長で良いぞ」

カタリナ「やりましたね！オージェ！」

オージェ「はっはっは！ルナティックも所詮この程度か！」

アンナ「んな事言つてると次で地獄見るわよー。」

ルーク「しかし、俺だって腕には自信があつた…何で負けたんだ？」

オージェ「ルーク、今は君の言ってる事が正論に聞こえるよ」

ロディ「お前が強くても、それはお前一人の力にすぎない。

オージェは、ライアンと上手く力を合わせて戦った。

だから、お前は負けたんだ。」

オージェ「葉っぱ良い事言っなあ…ルナだとそれがよく分かるよ」

ライアン「兄さんも言っていました。人は、弱くても、力を合わせれば強くなれるって…」

オージェ「ライアン…子供だなんて言つてごめん。

君は今回凄く重要な弓兵兼盾役になってくれたよ…」

ルーク「そつか…俺は俺一人が強けりやいって思ってた。けど、違うんだな！」

カタリナ「良かった。わかっていただけたんですね」

ルーク「リーダーって意外とめんどくさそうだしな！

そーゆーのはオージエに任せた！」

カタリナ「…本当に分かっていたただけたのでしょうか？」

ロディ「しかし、カタリナ。君は人を見る目があるな。

君の言った通り、オージエはやはりリーダーに適していた」

カタリナ「はい。オージエなら、やってくれると信じていました。」

オージエ「ははは、そんな言われると照れちゃうな」

ロディ「私ももう少し、間合いをとってから近づくべきだった」

オージエ「いや…ルナのステータスでんな事されたらホントに死ぬ…」

ロディ「オージエ、良い訓練になった。感謝する」

オージエ「こっちは訓練どころじゃなかったんですが…

それにしても、ルナって敬遠してたけど、この調子なら余裕でいけそうだな！」

アンナ「…ふふ、まあそう思っておきなさい。
次の章で地獄を見るから…」

前日編3 訓練開始

あらすじ とりあえず第七小隊の訓練を開始

カイン「今日から第七小隊の訓練にあたる、カインだ！」

カタリナ「カイン様：前回の戦争でも大活躍したと聞いています。
「猛牛」の異名をとるとか」

オージエ「前作でもカインは安定してたなー」

カタリナ「アベル様との活躍が目立ったそうですよ。

あ、でもアベル様はもうアリティア騎士団におられないとか…」

カイン「おい！そのふんどし娘！
なにをこちゃこちゃ言っている！！」

カタリナ「ええっ！！？」

ルーク「おい！カタリナちゃんに何て事を！！」

ロディ「ルーク！落ち着け！」

カイン「何を言うか！

どう見てもそれはふんどしだろうが！！」

ライアン「その結論も、どうかと思います……」

カタリナ「というか、ふんどし、って何ですか…?」

ルーク「世の中にはな…」

知らない方が良い事ってあるんだぜ…」

カイン「そんな格好でここに来るのはなっておらん!」

オージエ「そうだそうだ!色々とけしからん!」

カタリナ「…なんだかよく分かりませんが、ごめんなさい…
今度から服装変えてきます…」

カイン「!い、いや、服装を変えろというのではないのだ。いい。
お前は素質があるから、その格好でも良いぞ、むしろ大歓迎だ」

カタリナ「そうですか?ありがとうございます…」

オージエ「何の素質だよ…カインただの変態じゃねーか…」

アンナ「あなたには言われたくないけどねー」

カイン「それはさておき、今回の訓練は、
なんとシーダ様が直々に相手をしてくださるぞ!」

カタリナ「!あのシーダ様ですか!」

カイン「そうだ!良かったな、見えるぞ!」

ロディ「何がですか?」

カイン「！い、いや、その、シーダ様を相手に戦う事で、お前達も戦いの本質を見極められるかもしれないと言っているんだ！」

オージェ「カインマジで変態だな…」

アンナ「だからあなたには言われたくないわよー」

シーダ「今回の戦闘は私が担当するわ。
皆、私の事は気にせず、手を抜かないでかかってきて。」

カタリナ「シーダ様と戦うなんて…ドキドキです。」

オージェ「カタリナさん、何にドキドキしてるんですか？
女マイユニとの会話といい色々とカタリナさん危ないですよ」

アンナ「こらこら、純粋なカタリナちゃんに変な疑いを抱かないの」

オージェ「そういう所がまた好きなんだけどね！カタリナさんハアハア」

アンナ「救いようないわねこいつ」

ロディ「だが、気をつけた方が良い。シーダ様は、強さも相当なものだぞ。

特にその速さはかなりのものだと聞いている」

カタリナ「そうなんですか…」

ロディ「何と言っても、ペガサスナイトだからな」

ライアン「！」

カタリナ「ですよ…皆さん、頑張ってください！」

ロディさん、オージエも、ルークも、ライアン君も…って、ライアン君？」

ロディ「！？ライアンのおかしいぞ？」

ライアン「へえ…ペガサスナイトか…
そいつぁ良いね…じゅるり」

オージエ「！！？何か性格変わってるー！！」

ライアン「…くっくく、今から戦が楽しみになってきたなあ…」

オージエ「どうしたのライアンー！？何があったの！？」

アンナ「飛行系がいると性格変わるみたいねー」

ライアン「ペガサスがいたら連れて来い…一撃で仕留めてやらあ…
血が騒ぐぜ…へへへっ」

オージエ「K O E E E E ! ! ! ! !」

アンナ「という訳で、とりあえずスタートです」

オージエ「さて、まずは… … あら？」

アンナ「どつたのー？」

オージエ「あー、せんせー、これって…

勝てんの？」

アンナ「勝てないゲームなら設計しないわよ」

オージエ「ていうかロディ！ルーク！貴様らどうしたー！」

ルーク「んー？何がだ？」

オージエ「その貧弱なステータスは何だあー！！

お前前章でHP32はあつただろーが！！

それが何で20まで落ちてんだよー！！」

ルーク「なんか 調子悪いんで」

オージエ「調子悪いじゃねー！！！！バイオリズムは暁だろーが！！！！
ていうか暁のバイオリズムでもそこまで変動しねーよー！！！！」

アンナ「というわけで、調子の悪いルーク、葉っぱと、妙に燃えてるけどやっぱり直接攻撃に弱いライアン君。まともに戦えるのは悔しいけどオージェだけ。この弱小部隊でどうやって勝つのか、見物ねー」

オージェ「とりあえず、右下済に待機して敵を待ちます！いざ、敵ターン！」

アンナ「傭兵向かってきたわねー」

オージェ「ぐはっ！だが、お前一人の攻撃くらいでは僕は落ちないぞ！」

シーダ「あなたは傭兵なのね…ふふ、頼もしい」

オージェ「ぎゃあああああああ！！！！」

なんでこっちくるんですかシーダ様あああああ！！！！！！」

シーダ「力を見せてもらっわよ」

オージェ「そっちから攻撃して一撃で倒す時言う台詞かあああああ」

オージェ「普通ボスって動かないって思うじゃん！！」

アンナ「何言ってるのよー、今作では動かないボスはちゃんと、攻撃範囲表示したらわかるでしょー。これは貴方が悪いの」

オージェ「うう…手厳しい…」

アンナ「もっかいやり直しねー」

オージェ「とりあえず、シード様の範囲に入らないようにします！」

アンナ「賢明な判断ねー」

オージェ「センサー！ロディ君が死にました！

戦士と傭兵の集中砲火によって二回の攻撃で落ちたであります！」

アンナ「葉っぱより貧弱なのねー。はいはいリセットリセット」

オージェ「センサー、またロディ君が死にました！」

アンナ「またロディ君？」

オージェ「どうも、戦士の攻撃はロディ君に向く傾向にあるようです！」

アンナ「ちゃんと3すくみを分かってるのねー。」

オージェ「このままじゃ埒があかない…

誰を出しても戦士と傭兵に攻撃されて死ぬんじゃない…」

アンナ「どうすればいいと思う？」

オージェ「ハッ！そうだ！二回攻撃されて死ぬんだったら、
一列に並べば、敵は一回ずつしか攻撃できないはず！」

アンナ「ぴんぽーん。

とりあえず、右上に四人を並べるのが正解と言えるわね！」

オージェ「ロディ君はすぐ死ぬので真ん中です！

上から僕、ロディ、ルーク、ライアンと置いて、敵の動向をはかる
であります！」

アンナ「なかなかやるわね！。でも、それだけじゃここは勝てない
わよ！」

オージェ「戦士はロディ君、傭兵はライアン君をぺちぺちし始めた
であります！

とりあえず傭兵君を弓と僕の攻撃で倒して、そして…」

アンナ「どうしたの？」

オージェ「センサー！」

どう頑張っても、ニターン目にはどっちか一体しか倒せません！」

アンナ「そう、そこにこの章の難しさがあるのよねー」

オージエ「と言いますと？」

アンナ「ねえ、普通どうする？」

敵が一体残ってて、その一体の攻撃を受けたら死ぬ状態、そして誰も逃げられない状況だったら……」

オージエ「どうしようもないであります！

敵の攻撃を避けるのを祈るしかないです！」

アンナ「そう、それ」

オージエ「へ？」

アンナ「この状況を切り抜けるには、

戦士の攻撃を上手くかわすのを祈るしかないのよー」

オージエ「運ゲーじゃないですかそれ！！

うああああ！！ば、僕HP少ないんですー！！こっち来ないでー！！」

アンナ「ここであなたがよければ、もう勝利は目の前……」

ズガアッ

オージェ「く…」

カタリナ「オージェ！？しっかりしてください！オージェ！！」

オージェ「はは、は…こんななんとゲボオフ」

アンナ「GAME OVER」

オージェ「酷すぎます！」

アンナ「ふふふ、前章でかましてた余裕はどこへ行ったのやら」

オージェ「ごめんなさい！謝ります！ルナティックは、本当にきついです！

真のルナティックを垣間見た気がしました」

アンナ「これからまだまだ難しくなるんだろうけどねー」

オージェ「もうやだああああ」

オージェ「センサー！ライアン君が必殺を受けて死にました！」

アンナ「2%の必殺受けるとかどんだけ運悪いのよー。リセットしなさい」

オージェ「センサー！またロディ君が死にました！」

アンナ「あなたロディ君コロスの好きねー、なんか恨みでもあるの？」

オージェ「いえ、ただ、ロディ君は戦士から真っ先に攻撃されて、しかも絶対に避けない、あと敵に反撃で与えるダメージも大した事ないので

傷薬で回復するほどの価値もなく、回復も怠りやすいんです」

アンナ「ロディ君は不幸の星のもとに生まれてきたのねー。はいはいリセット」

オージェ「ここで、僕が避ければっグボォウ」

カタリナ「そんな！？オージェ！しっかりしてください！」

オージェ「はひ…流石に、もう、ちょっときついかもグボォフ」

アンナ「GAME OVER」

オージエ「僕が死ぬたび毎回これやるんですか？」

アンナ「ええ」

アンナ「で、また同じ状況」

オージエ「ぎゃあああ！！また戦士がこっち来たー！！
外せ！攻撃を外すんだ！外せ！お前外せ！！」

Miss！

オージエ「いよっしやああああああ」

アンナ「ナイスー、よく避けたわねー。命中は80前後なのにねー」

オージエ「せめてもうちょっと回避率を高くしてほしいであります
！」

アンナ「避けゲーだったGBAよりはるかに回避低いからねー」

オージエ「さっきまでよくも何度もしリセットさせてくれたなー！ド
リヤー！覚悟ー！」

アンナ「この傭兵と戦士さえ倒せば、ひとまず安泰ねー」

オージェ「はい！ここで負けたら、全てが水の泡です！
とりあえず、またターンをじっくりかけて皆に待機しまくって、態
勢を立て直します！」

アンナ「賢明な判断だと思うわー」

オージェ「そして、左上で寂しそうにしてる戦士を
おびきよせて倒します！喰らえー！」

アンナ「あらあら、必殺出たわねー。必要ないところでだけ必殺でる
のねー」

オージェ「僕の剣の腕は伊達じゃないですから！」

アンナ「ならもうちょつと必要なところで必殺出しなさい。さて、
残るはシーダ様ねー」

オージェ「速さ14って明らかに前日編のステータスじゃないです！
僕以外誰を出しても追撃されて死ぬとか理不尽すぎます！」

アンナ「ってー事で、対抗可なのは一人だけ速さのステータスが1
4っていう

おかしいオージェ君だけでーす。」

オージェ「シーダ様！来い！」

シーダ「あなたは傭兵なのね。ふふ…頼もしい。」

アンナ「さっきまで何度もリセットしてた傭兵のどこが頼もしいのか疑問ねー」

オージエ「シーダ様！！あなたとはいえ容赦はしません！！」

アンナ「とりあえず、シーダ様が必殺を出さなければ死なないわー」

オージエ「よし！何とか耐えた！つと、ここで…」

ライアン「おらおらおらおら！！びびってんじゃねえ！！俺の弓を受けてみやがれクソアマがあー！！」

オージエ「ライアン君も何度もリセットされて腹が立ってるようですね。」

ライアン「…ちっ、一撃で仕留められなかったか…」

アンナ「でも、ライアン君が24ダメージ与えてくれたおかげで…」

オージエ「最後は、僕が倒す！！ドリヤー！！」

シーダ「っ…！！」

オージエ「レベルアップ」

ぐあ！力と技と速さと幸運！守備が！守備がない！！」

アンナ「まあ、何度もリセットしてようやく得たクリアだし、妥協しましょうか」

シーダ「よくやったわ。私達を負かした騎士見習いはあなた達のはじめで。」

オージエ「でしょうね！

あんたら負かせられるやつなんて
そうそういませんよ！」

シーダ「これから、私もあなたと一緒に戦うわ。」

オージエ「えっ！？いいんですか？」

カタリナ「私、ジェイガン様に聞いてきます！」

ジェイガン「ふー、縁側で飲むお茶は美味しいのう」

オージエ「コラー！！

僕達が命がけでシーダ様と戦ってた間

あんたは何やってんだー！！

ていうかアリティア城に縁側があるだけで驚きだよー！！」

ジェイガン「おお、お前達か。これは、特注で作ってもらったんだ。猫も下で寝てると思うぞ。レテとか」

オージェ「レテは駄目です！！強すぎます！！」
ラグズがこんなとこいたらシャレになりませんよ！！」

ジェイガン「で、何の用だ？どっこいしょ…っ」と

オージェ「完全にヨボヨボの老人だコイツ…」

カタリナ「あ、あの、シード様と共に戦う事になったのですが、よろしいのでしょうか？」

ジェイガン「あー、いいんじゃない？許可するぞい」

オージェ「やる気なさすぎだろ…」

カタリナ「良かった！シード様がいてくれたら百人力です！」

オージェ「でも、それじゃあ僕達の訓練にならないんじゃない？」

ジェイガン「…お前は、マルス様の戦い方を、知らないんだっか？」

オージェ「いえ、知っています。身分の違う者達も力を合わせ…
そうか、誰もが力を合わせる、それがマルス様の戦いでしたね。
だからシード様と戦うのを許可してくれたんですか」

ジェイガン「左様、それにだ」

オージェ「それに？」

ジェイガン「ぶっちゃけ、ルナティックなら
シーダ様が入ったくらいで楽にもならんだろう」

オージェ「本当にぶっちゃけたなおい！」

ジェイガン「ま、そういう感じで頑張れやー」

オージェ「やる気ねージェイガン様……」

カタリナ「でも良かったです！シーダ様が入ってくれて嬉しい限り
です！」

オージェ「カタリナさん……一応聞くけど、どのへんが嬉しいの？」

カタリナ「シーダ様と共に戦えるなんて光栄ですから！」

オージェ「あ、ああ、まあそれならいいんだけどね」

前日編 4 新たな仲間

あらずじ とりあえず第七小隊の訓練は続くのでした

ルーク「はー」

ライアン「どうしたんですか？ルークさん」

ルーク「どつかに、可愛くて優しくて綺麗なシスターいないかなー」

ライアン「い、いきなりどうしたんですか…」

ルーク「騎士にはロマンスが必要だろ。傷ついた俺を優しく癒してくれるような」

ロディ「また下らん事を…お前は昔からそついう事ばかり考えているな。」

そんな事を考えるくらいなら訓練の一つでもしたらどうだ」

ルーク「ちっ、ロディの野郎は真面目でいけねえ。」

オージェは、ロマンスが必要だって思うよな？」

オージェ「思うけど、僕はもう他のロマンスなんていりましえん！だって、カタリナたんがそばに居てくれるから！」

ルーク「おーおー、そうかい、じゃ頑張れやー」

ロディ「そういえば、ルークはあんまりカタリナには興味を示さないな」

ルーク「お、ロディはカタリナ派か？」

オージエ「んだと！僕のカタリナを取る奴は許さないぞ！」

ロディ「違う違う。ただ、昔っから色んな女に声をかけては振られてきたお前にしては、珍しいなと思ったんだ」

ルーク「んー、俺はもつと色気溢れるお姉さんが良いんだよなー」

オージエ「分かってない！

ルークはカタリナさんから溢れ出る色気を分かってない！」

ロディ「はあ…付き合いきれん」

ライアン「そういえば、カタリナさんいませんね」

オージエ「会えない時間が愛を育てるのさ！」

ロディ「ああ、カタリナなら確か、

仲間になってくれそうな人を探してきます、とか言ってたぞ」

オージエ「ほー、そうかー。って、そんな話聞いてないぞ、僕は」

アンナ「ロディの方が信頼されてるって証拠ね」

オージェ「んだとー！！ロディ、お前カタリナさんに手を出したら許さんぞー！！」

ロディ「誰も手なんか出さない…むしろお前が出さないかが心配だ」

カタリナ「皆さん！」

オージェ「おー！カタリナたん！お帰り！」

カタリナ「私達の部隊に入ってくれそうな人を見つけました。癒し手になってくれるそうです！」

ルーク「おー！来たー！マイシスター！早く会わせてくれー！」

リフ「わたしは そうりよリフ
たたかいは できませんが ちりょうのつえがつかえます
よろしければ ごいっしょさせてください」

ルーク「…」

ロディ「…」

オージェ「傷薬！傷薬じゃないか！」

アンナ「この管理人は、一周目プレイで初見の時も、
カタリナから報告聞いた時点で「癒し手…まさか、傷薬か…？」と

思っただらしいわー。

FEプレイヤーの勘って奴が働いたのかしらねー」

リフ「なんだか かおいろが わるいようですね どうかなされま
したか」

カタリナ「あ、ルークの事は大丈夫です。

それより、これからよろしくお願いします。」

リフ「よろしく おねがいします」

オージエ「そのファミコン訛り何とかしろ」

カイン「さて、今日も今日とて訓練を始める！」

オージエ「サーイエッサー！地獄の前章をクリアしたんだ、怖いも
のなどない！」

アンナ「また調子に乗って」

カイン「むっ、カタリナ、お前今日はふんどしじゃないのか」

オージエ「仲間の前で面と向かってふんどしとか言うな変態隊長！
変態長！」

カイン「何だと！隊長に向かってなんという言葉遣いだ！」

カタリナ「い、いえ、この前カイン様が何だか

私の服装に怒っていらつしゃったので…」

カイン「あの服でないと駄目なんだ！

着てくるのもけしからんが、着てこないのはもつとけしからん！」

オージェ「コイツマジで誰か何とかしろ」

アンナ「アベルがエストちゃんと結ばれちゃっていなくなったもんだから、

それまで全く無関心だった萌えの意識が目覚めてきたのかしらね」

カタリナ「ご、ごめんなさい。次からは着てきます」

カイン「うむ、それでよろしい」

オージェ「まあ、カタリナさんはあの服装が一番似合うからな」

カイン「おう、分かっているじゃないか、オージェ。

さっきのお前の態度は取り消してやろう、今度一緒に語り合おうじゃないか」

オージェ「いいですよ！軽く10時間は語れます！」

アンナ「んな時間あったらみんなの様子見ろ」

オージェ「まだみんなの様子解禁されてないでしょ」

シーダ「あら、カイン」

カイン「はっ！シーダ様！そういえば、シーダ様は今回から、第七小隊に入るのでしたね！お氣をつけて！」

シーダ「いいえ、心配はいらないわ。

それより、なかなか訓練が始まらないと思ったら、一体何を話していたの？」

カイン「そ、それは、軍内の風紀についてです！」

シーダ「嘘おつしゃい、全部聞こえてたわよ」

カイン「も、申し訳ありません！次からは、速やかに訓練を開始します！」

シーダ「ええ、今度カタリナにふんどしとか言ったら、ウイングスピア突き刺すわよ」

カイン「ひいひいひい」

シーダ「大丈夫だからね、カタリナ。

あなたはあなた自身に一番合う格好で良いのよ」

カタリナ「はっ、はい！シーダ様……」

カイン「……えー、こほん、すまなかった。それでは訓練を始める！」

カタリナ「……」

オージェ「カタリナさんまだ恍惚としてるよ…やっぱりその気があるんじゃないの？」

カタリナ「はっ、オージェ…何か言いましたか？」

オージェ「あ、いや。カタリナがぼーっとしてたから気になって」

カタリナ「はい、私、シーダ様と話せて…つい、意識が飛んでしまいました」

オージェ「意識飛んだって…」

カタリナ「やっぱり、シーダ様は綺麗な方ですね…」

マルス様のフィアンセなだけあります。
そんな方と話せて、私は幸せ者です…」

オージェ「…やっぱり、カタリナって…」

カイン「そこお！何を喋っている！先ほどは俺も無駄話をしてしまったが、

その話はもう終わった事だ。今からはビシビシ行くぞ！」

カタリナ「はっ、はい！」

カイン「で、今回の訓練だが…珍しい方に相手を務めてもらう事になった。

アカネイアの、ジョルジュ殿だ」

ジョルジュ「君達がアリティアの騎士見習いか、よろしく」

オージェ「大陸一さん！大陸一さんじゃないか！」

何だこの前日編4は！ネタキャラ総登場じゃないか！

ロディ「大陸一さん？」

カタリナ「大陸一の弓騎士と呼ばれる方です…気をつけて立ち向かいましょう」

ロディ「ああ、そうだったな。かなり厳しい戦いになりそうだな…」

オージェ「大陸一、ヒーニアス王子、ヲルト、ザガロ、トーマスと
いい、

弓兵はネタに困らないな」

アンナ「んな事言ってるその後で後悔するわよ」

ジオルジュ「それでは、訓練を始めるとしよつか」

アンナ「はい、というわけでようやく本編スタートです」

オージェ「というかこれが本編なのかどうかも疑わしいでアリマス」

アンナ「まあ、一応攻略としての形をとっているぶん茶番よりはマシだと思っけど」

オージェ「はい…さて、相手は相変わらず強いな…大陸一さんのステータスは…」

！ ！ ？
」

アンナ「どしたのー？さっき大陸一（笑）とか言っただけに馬鹿にしてた
じゃない」

オージエ「いや！そこまでは言っただけですよ！ただ、多少馬鹿には
してましたけど！

何ですか！？何なんですかこいつ！？HPが38！？速さが16！？
明らかに序章のステータスじゃないですよ！」

アンナ「毎回同じ台詞が出るわね」

オージエ「だってそれくらい驚いてるんですよ！

これは前章のシーダ様以上に酷い！

…というか、やっぱりシーダ様は今章になるとパラ落ちてるんです
ね」

シーダ「なんか 調子悪いんで」

オージエ「またそれですかい…」

アンナ「さてさて、HPがべらぼうに低いシーダさん、
相変わらず調子の悪い葉っぱとルーク、

弓兵いるからあんま活躍できなそうなライオン君、
そしてちりょうのつえしか使えないリフぐすり、

相変わらずまともな戦力はオージェくらいねー」

オージェ「どうです！性格は異質だと言われようが、強いからいいんです！」

アンナ「そうねー。まあまともな戦力といつても、耐久力は他の奴らと変わらないくらい貧弱だけど、力がなかなか高い上に、速いからザコ全てに追撃が効くのが大きいわねー。

ここで、貴族の子を選んでおいたあんたの作戦がちよつとは活きるようねー」

オージェ「しかし大陸ーさんは僕以上に速いであります！僕は今速さ15しかありません！」

アンナ「大丈夫、それは大陸ーさんがおかしいだけだからー。」

オージェ「ていうかどうやって倒すんですか、これ」

アンナ「まあ、まずは眼前の兵士と傭兵を倒してから話を始めましょうねー」

オージェ「とりあえずライオン君が弓でチクつと攻撃して、後はHPの減ってる傭兵君を適当なユニットで倒す！そして、傷薬フさんのライブで回復してもらった僕が、残った戦士を倒す！完璧な作戦じゃないか！」

アンナ「ここまでは割と楽よねー」

オージエ「そして、離れた弓兵は近づいてこないっぱいので、とりあえずリフさんのライブで傷ついた全員を徹底的に回復します！」

リフ「おやくにたてて　こうえい　です」

オージエ「でも、シード様は回復しません！
だって弓兵の攻撃受けたらどーせ死ぬもん！」

アンナ「ほー、ちょっとはライブ節約の術を考えたのねー」

オージエ「さて…ここから、だ…」

とりあえず…僕が近くの柱に乗って、アーチャーをおびき寄せよう。
僕しか弓での攻撃二回には耐えられないし。
後は近づいたアーチャーを返り討ちにすれば良い」

アンナ「さてさて、どうなることやら」

オージエ「弓で二回も攻撃を受けたが、しかし耐えたぞ…」

つて、えー!!!?」

アンナ「大陸一さんも動いたわねー」

オージエ「大陸一さん何で動いてくるんスカ！
こんな時だけ仕事しないで下さい！」

アンナ「さ、あんたのターンよー」

オージエ「無理であります！弓兵二体と大陸一さんをこのターンで

全部倒すなんて、

我がヘッポコ第七小隊には出来ない芸当であります！

ていうかこの大陸一さんのステータスなんですか！

速さはまだ許すとして、固すぎます！！

HP38つてのが物凄くきついです！倒せるわけねーだろー！」

アンナ「結局、このターンは弓兵一体倒すだけで終わったわねー」

ジョルジュ「こんにちは」

オージェ「ぎゃーそ！大陸一さん！ごめんなさい！

あなたはホントに大陸一です！お許し下さい！」

ジョルジュ「じゃあ、戦ろうか」

オージェ「ぎゃああー！恐怖の二回攻撃でロディ君が死にました！」

アンナ「ロディ君ほんとよく死ぬわねー、死亡回数第一位じゃないの？」

オージェ「はい、ロディ君が第一位で、僕が第二位であります」

アンナ「そっぴやあのルークは涼しい顔して一度も死んでないわねー」

オージェ「どういうわけかルーク君攻撃されにくいですよね……」

アンナ「ロディ君が死んでも、悲劇はまだまだ終わらない」

オージェ「ほぎゃー！シーダ様が射抜かれました！

あの弓兵死刑モノです！

マルス様のフィアンセを弓で貫きました！」

アンナ「あんただって前章でライアン君にシーダ様を攻撃させたじゃない」

オージェ「あのシーダ様はルナティック仕様だったから良いんです！今のシーダ様は、弓一発であっけなく昇天してしまう、弱い女の子なんですよ！」

アンナ「確かに、前章のシーダさんのマッチョっぷりはとんでもなかったわねー」

オージェ「どうすればいいんだ…」

アンナ「とりあえずリセット、もっかいやり直して、現在またリフが皆を回復した後の状況で悩み中でーす」

オージェ「くそ！大陸一め…弓兵と同時に近づくとか、基本的に敵がおバカなこのゲームで珍しく高度なAIを持ってらっしゃる…」

しかも強すぎる…ヒーニ阿斯王子とかヲルトならまだ楽なものを…いや、ヒーニ阿斯王子も結構手ごわいか…

ん？ヒーニアス王子…？そうか！これだ！

助けて！エイリーク！！」

アンナ「一応説明すると、助けてエイリークとは、弓兵が囲まれて動けなくなった状態の事よ」

オージェ「普通に戦っても勝ち目はない！

ならば、かのヒーニアス王子の『助けてエイリーク！』という言葉のごとく、

囲んでしまえばいかにジョルジュ様といえ、倒せるぞ！！」

アンナ「分かっているとと思うけど、助けてエイリークって台詞は公式じゃないからねー」

オージェ「さあ来い！

よし！予想通り、敵はまんまとこちらの罠にはまった！！」

アンナ「なかなかやるじゃない」

オージェ「とりあえず、ザコ弓兵をロディ君で削って、とどめはライアン君で！！」

アンナ「うんうん、良い選択ねー」

オージェ「センサー！しかしここで問題が発生しました！
ライアン君が80%近くの中を見事に外して、反撃で死にました！」

アンナ「あらー、せっかく頑張ったのにねー。

まあ、解法が分かったならとりあえずやり直さない」

オージェ「おっしゃー！残るはとうとうザコー体と大陸一さんのみ！
しかも、ザコと大陸一さんの間の距離は1マス！

囲んでくれと言ってるようなものです！

ロディ君！ようやく活躍の時だ！囲めー！」

アンナ「良かったわねー」

オージェ「リフさんまで使って総勢五人で弓二人を囲みました！

あとはもうちくちく突きまくるだけです！

普段活躍の場がありませんロディ、ルーク君を中心に、削りまくり
ます！」

ジョルジュ「！見事だ…」

オージェ「さすがの大陸一さんも囲まれたらひとたまりもあるまい
！作戦勝ち！！」

アンナ「良かったわねー」

オージェ「しかし、前章で偶然いい選んだから良かったけど、これアテナだったらどうなってたんだよ…」

アンナ「よかったわねー、囲まれると何にも出来ない弓兵が相手で」

ジョルジュ「見事だったよ」

オージェ「ふっふ」

ジョルジュ「私はついていつてやれないが、

ゴードン、お前が助けてやるんだ」

ゴードン「はい！僕がお力になります！」

オージェ「えー…ゴードンかよー…しかもヲルト臭がする」

アンナ「なんでもかんでもヲルトと結び付けないのー。

あんた一回封印ハードやってみなさいよ、ヲルトほんとに酷いからね」

カイン「さて！ここまでのお前ら第七小隊の順位を発表する！

怪我して離脱した者が多いほど評価は低くなるぞ！心して聞くように！」

オージェ「まあ、リセット回数ならどの小隊にも負けない自信があります！」

アンナ「変なところで自信持たないのー」

カイン「お前らは…第一位だ！素晴らしいぞオージェー！」

カタリナ「やった！オージェー！」

オージェ「はっはっはー、これもやっぱり僕だから成せる技だねー」

アンナ「ほんと調子に乗りやすいのねー」

カイン「それではこれからも、この調子で頑張るのだぞ！」

その後、アリティア王宮内に来たオージェ

オージェ「へー…やっぱ広いなー、王宮って…」

エリス「あら、あなたは、騎士見習いの方？」

オージェ「あ、はい、オージェといいます。

リリーナ様…じゃなかった、マルス様の騎士見習いです」

エリス「そう…私はマルスの姉、エリスです」

オージェ「おお！エリス様！失礼しました！」

エリス「いえ、いいのです。それより…貴方はマルスをどう思いま

す？」

オージエ「前の暗黒戦争の英雄です！（建前）」

エリス「そう…マルスは皆から、英雄王と呼ばれているわ。

でも…本当のマルスは、弱く、傷つきやすい子」

オージエ「マルス様が弱い…？今はレベル30まで上がるのに？」

アンナ「アンタはいちいち変な事言わないの」

エリス「ええ。全ての人を救いたいと、心から願っている。
戦場で一人が倒れても、それはマルスにとっては耐え難い事…」

オージエ「前作でユミルに会う為に
何十人と殺してましたけどね！」

アンナ「それ言っちゃおしまいよー」

エリス「どうか、お願いします。騎士になったら、
マルスを守って、あの子の理想を叶えてやって下さい…」

オージエ「はい！マルス様をお守りしてみせます！
ゲームオーバーにならない為に！」

アンナ「だからアンタは一言余計なのよー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3325o/>

今日のFE

2011年1月8日23時34分発行